

# 「歴史の証人」保存に熱意



## モノの継承

平和宣言の直後、一斉に放たれたハト。その背景に、



地震対策工事で取り付けられた鉄骨を指し示す和泉さん。崩れかけた壁を補強している。広島市中区

## 本県との温度差実感

ヒロシマの象徴「原爆ドーム」が重なる。

8月6日、広島平和記念式典。核兵器廃絶と恒久平和を願う約5万人の参列者を、ドームは71年前と変わらぬ姿で見守っていた。

この日は早朝から深夜まで、ドームの周囲に人が途絶えることはなかった。一

初めで行った。

施工方針のたたき台をつくるなど、工事で重要な役割を担ったのが小山市出身で広島市職員(和泉淳之さん、46)。大学卒業後、広島市役所に入った。

被爆の惨禍を伝える世界文化遺産を守る仕事。「携われて光栄だが、失敗は許されない。後世に残さなければならぬプレッシャーを感じる」。ドームを見上げ、表情を引き締めた。「永久保存」を究極の目標に掲げて対策に取り組む広島市の決意が伝わった。

ドーム南側の公園内にある広島平和記念資料館。焼け焦げた学生服や、中のおかずが黒焦げになった弁当箱など約400点の被爆資料が並び、悲惨で残酷な現実を包み隠さず提示する。

市民を中心に寄せられた

遺品は現在、約2万点。手記も合わせるとさらに膨大な量となるが、全てを同資料館と隣接する国立広島原

爆死没者追悼平和祈念館に収蔵している。年間約50人が資料を持ち込むと聞き、被爆の歴史を残そうとする市民の強い思いを感じた。

一方、本県の戦争史料の保存状況はどうか。県立博物館には、写真や軍服など

の戦争遺品の寄贈を年間2、3人が申し出ている。所有者の死亡に伴うケースが大半で、これまでに1千点以上の資料を引き受けた。ただ重複する物などは返却しているという。担当者は「収蔵庫に余裕がなく、収集を積極的に呼び掛けることはできない」と嘆く。

広島資料館、祈念館は現在、被爆資料や遺影、体験記の収集を全国に向けて約10年ぶりに呼び掛けている。同資料館の担当者は焦燥感に駆られていた。「被爆80年の時、多くの被爆者はいなくなる。その前にできるだけ資料を集めたい」

「モノ」はありのままの現実を無言で証言し続ける。「歴史の証人」の保存はどうあるべきなのか。被

爆地と本県の温度差を感じざるを得なかった。

に参加した。戦後71年、被爆者の高齢化が進む中、いかに記憶を次世代に引き継いでいくか。広島を取り組むを本県につなげたい。(石井賢俊)